

日本が誇る分子生物学者。生体の営みを、分子レベルの超微細な世界に分け入り追究する。

「われわれの体の中で起きていることが分かるって、面白いじゃないですか」と魅力を話す。

研究対象は細胞内にある小器官「小胞体」。ホルモンなど生命活動に必要なタンパク質を合成する工場だ。品質管理をきちんと行い、つくり損ないの不良品タンパク質は選別・廃棄する。何らかのストレスで工場に異常が生じると、製造機能を正常に整える。

「小胞体ストレス応答」と呼ばれる一連の働きを、25年にわたる研究で徐々に解明。ガード

京都大教授

もり 森 かずとし 和俊さん(55)



ノー国際賞(2009年)をはじめ数々の賞を受け、ノーベル賞候補との声も掛かる。糖尿病、パーキンソン病など多くの病気に関わることも分かり、創薬研究への発展も期待されている。

倉敷市の生まれ。青陵高から、ちですぐいい研究者と争いながら、よく生き残れた」と笑う。そのバイタリティーを培ったのは剣道だ。倉敷・味野中で始め、現在も週1、2度は小中学生の指導に汗を流す。「剣道には、恐れがない、惑わない、といった戒め事がある。おかげで、めったなことでは動じなくなった」。研究活動と並ぶ人生の柱だという。

今、憂うのは大学院生の博士課程離れ。学費負担や研究職のポスト不足など、制度自体に問題があるとし、改善を訴える。

京都大工学部へ進み、2年時に薬学部へ転じた。30歳の時は国内の大学を飛び出しアメリカへ。その後も数年単位で拠点を変えた。流転の連続に「あちこち自分の可能性を信じて」(小野暁)

小胞体働き解明続け25年

ラスカー賞 森京大教授



森和俊教授

倉敷生まれ

細胞の機能解明

賞した山中伸弥京都大教授に次いで7人目。他に、

細胞内の小胞体と呼ばれる小器官で、タンパク質が折り畳まれて正しく機能するための仕組みを解明した。米カリフォルニア大サンフランシスコ校のピーター・ウォルター教授との共同受賞。19日に米ニューヨークで授賞式が行われる。

日本人の受賞者は、人工

多能性幹細胞(iPS細胞)を開発して2009年に受

賞した

米国で最も権威がある医学賞で、ノーベル賞の登竜門ともいわれる「ラスカー賞」の今年の受賞者に、京都大の森和俊教授(56)と倉敷市生まれのIIが選ばれた。米国のラスカー財団が8日発表した。

ノーベル医学生理学賞を受賞した利根川進氏や高脂血症治療薬のスタチンを開発した遠藤章氏らがいる。

森教授が解明した「小胞体ストレス応答」と呼ばれる仕組みは、がんや糖尿病、パーキンソン病、潰瘍性大

腸炎、脂肪肝などの数々の病気に幅広く関わり、この仕組みをもとに、世界中で新薬開発に向けた研究が進められている。

森氏は1981年に京都大を卒業。2003年から京都大教授。